

## 今週の為替相場見通し(2023年1月10日)

| 総括表      |      | 先々週から先週の値動き |                 |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|-------------|-----------------|--------|-----------------|
|          |      | 注           | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |             | 129.51 ~ 134.78 | 132.09 | 129.00 ~ 134.00 |
| ユーロ      | (ドル) |             | 1.0482 ~ 1.0715 | 1.0645 | 1.0600 ~ 1.0850 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |             | 137.45 ~ 142.94 | 140.56 | 139.00 ~ 144.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |             | 1.1842 ~ 1.2126 | 1.2093 | 1.1850 ~ 1.2250 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *           | 155.36 ~ 162.34 | 158.47 | 156.50 ~ 161.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |             | 0.6679 ~ 0.6886 | 0.6876 | 0.6740 ~ 0.6890 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *           | 87.41 ~ 91.06   | 89.37  | 92.00 ~ 93.80   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 129.00 ~ 134.00 円

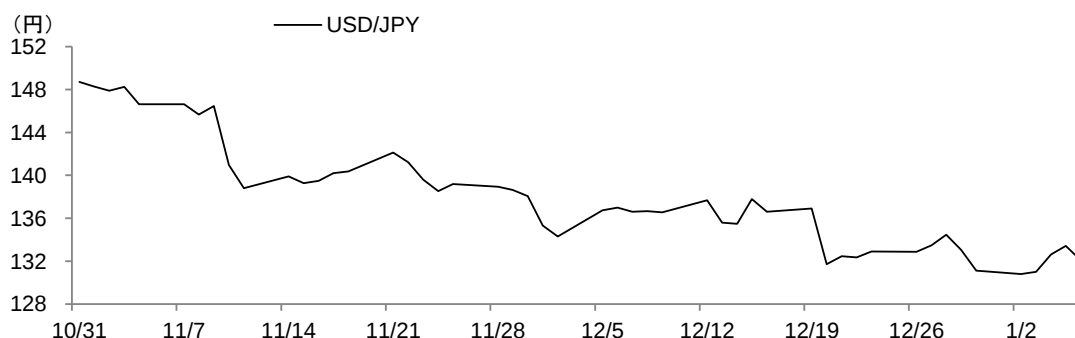
(2) ポイント【先々週から先週の回顧と今週の見通し】

先々週から先週にかけてのドル/円相場は、一時130円を割り込む場面も見られたが、先週半ばから後半にかけて上昇した。先々週は、週初クリスマス休暇のため133円付近を中心に動意に乏しい相場展開が継続したが、28日は月末の実需フローなどから一時134円台まで上昇した。週後半は、ドル売りの流れが強く、30日は131円付近まで反落して取引を終えた。先週初2日、主要国市場が休場となる中、ドル/円は130円台後半でじり安となった。3日、ドル/円は東京休場で流動性が低い中、日銀による物価見通しの上方修正観測が意識され、早期の金融緩和政策修正への期待感から円買い相場となり、一時週安値となる129.51円まで下落した。海外時間は、米金利上昇を受け131円付近まで上昇した。4日、再び一時130円を割り込んだが、米11月JOLT求人件数が市場予想を上回ったことを受け、ドル買い優勢となり、132円台後半まで上昇した。5日は米12月ADP雇用統計や米新規失業保険申請件数の堅調な結果を背景に、米金利上昇とともに一時134.04円まで上昇。しかしその後は、ブラッドセントルイス連銀総裁が政策金利は十分に抑制的な水準に近いと発言すると、133円付近まで値を下げた。週末6日は、一時134円台後半まで上昇するも、米12月雇用統計において平均時給が市場予想を下回る結果となり賃金インフレの減速が確認されたことを受けて、132円付近まで反落して越週した。

今週のドル/円相場はインフレ圧力の緩和を受けて上値重く推移すると予想。先週末の米12月雇用統計では平均時給が市場予想を下回り、ドル/円は反落した。今週は12日(木)に米12月消費者物価指数の発表が予定されており、市場予想通り前回比低下の結果となればドルが売られやすいか。但し、今週は10日(火)のパウエルFRB議長の講演をはじめ、FRB高官の発言が複数予定されており、FRBメンバーの高インフレ継続に対する懸念・利上げ継続に対する姿勢は変わらないことを考えると下落幅は限定的となるのではないだろうか。

## (3) 先週までの相場の推移

先々週から先週(12/26~1/6)の値動き: 安値 129.51 円 高値 134.78 円 終値 132.09 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0850 139.00 ~ 144.00 円

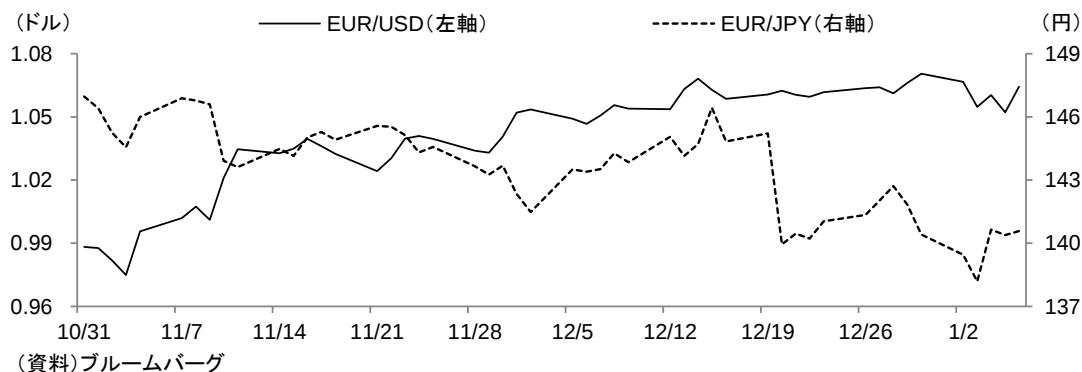
## (2) ポイント【先々週から先週の回顧と今週の見通し】

先々週のユーロ/ドル相場は1.06台前半でオープン後、欧米市場が休場の中、同水準を小動き。27日は英国や香港などが引き続き休場のため、動意に欠ける展開が継続したが、NY時間に入ると、一時3.83%台をつけていた米10年債利回りが3.8%を割り込むとユーロ/ドルの買い戻しが入り、1.0660まで反発した。週央28日、米金利が下げ止まり反転上昇する動きを横目にユーロ/ドルは1.06近辺まで反落。29日は米金利の低下による欧米金利差縮小や米株高を意識したリスクオンのドル売りにユーロ/ドルは底堅く推移。1.07目前では戻り売りに押されたが1.06台半ばでは下げ止まると、週末30日は流動性乏しくなる中、終盤にかけてドル売りが強まると1.0715まで上昇し、高値圏で越年した。先週のユーロ/ドル相場は、堅調な米経済指標を受け下落。1月2日、主要国休場の中ユーロ/ドルは1.06台後半でじり安推移。3日、独12月消費者物価指数の発表を控える中、インフレ軟化への期待感からユーロ売り・ドル買い相場となり1.05台前半に下落。週央4日、米金利低下を背景に1.06台前半まで上昇。しかし、NY時間には堅調な米経済指標を受け、米金利の反転上昇とともにユーロ/ドルは1.06付近まで下落した。5日、ユーロ/ドルはドルの戻り売りで上昇したものの、NY時間には良好な米経済指標や12月FOMC議事要旨でのタカ派な内容が材料視され、米金利上昇とともに1.0515まで下落した。週末、米12月雇用統計や米12月ISM非製造景気指数の結果を受けたドル売りを背景に1.0648まで上昇し、1.0645で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は底堅い推移を予想。12月ECB政策理事会は経済を慮って利上げ幅を+50bpへと縮小させたと考えられるが、ラガルドECB総裁の発言や声明文では、インフレの長期化と当面の利上げ継続が示唆されタカ派色の強いメッセージとなっていた。実際、先週末に発表されたユーロ圏12月消費者物価指数は、前年比2ケタ%は免れ、市場予想を下回ったものの、水準自体は+9%を超えるペースとなり、コアインフレは上昇。決してインフレが落ち着いたと言える水準にはなく、ECBのタカ派スタンス変更を強いるものではないであろう。かたや波乱含みとは言え、米国のインフレは前年比ベースで6月をピークに鈍化の兆候が見られ、一連の引き締めパスの終着点が見え隠れする中では、米金利の上値は重く、結果としてユーロは浮上し易い環境と考えている。

## (3) 先週までの相場の推移

先々週から先週(12/26~1/6)の値動き: (対ドル) 安値 1.0482 高値 1.0715 終値 1.0645  
(対円) 安値 137.45 高値 142.94 終値 140.56



## 3. 英ポンド

欧州資金部 藤原 海世

(1) 今週の予想レンジ: 1.1850 ~ 1.2250 156.50 ~ 161.50 円

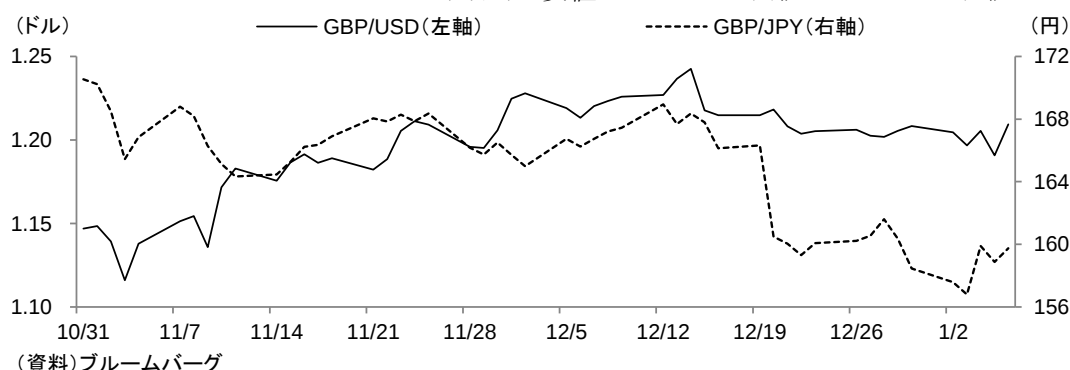
## (2) ポイント【先々週から先週の回顧と今週の見通し】

先々週から先週にかけての英ポンド相場は、対ドルではほぼ横ばい、対ユーロ、対円では下落する展開。英国のクリスマス祝日明けの昨年12月28日、年末で市場参加者は少ないものの27日の中国のコロナ感染拡大に対する懸念や日銀の緩和修正観測の巻き戻しを受けたドル高の流れから反転し、一時1.21台前半まで英ポンド高方向に振れるも長続きせず、結局英ポンドは対ドルで1.20近辺で推移。29日、NY時間入りまでは動意に乏しい前日引け水準でのレンジ推移に終始していたものの、米国時間朝に発表された米新規失業保険申請件数を受けたドル安を引き継ぎ英ポンドは対ドルで1.2050台まで上昇。30日、祝日を控え取引参加者が一層と限られる中、英ポンドは緩やかながらも対ドルでの上昇トレンドを継続。対円では日銀の政策転換への憶測を受けた円買いの流れを受け、157.50円近辺で越年。年明け1月3日、実需の買いに支えられたドル高の流れを受けロンドン時間開始から英ポンドは1.19近辺まで下落。その後、押し目買いが入り1.19台後半まで戻す展開。対ユーロでは予想を下回った独12月消費者物価指数(CPI)を背景としたユーロ安を受け一時0.87台後半まで英ポンドは上昇。4日、ロンドン時間朝方に発表された英12月製造業PMI(確報)が市場予想を上回るものだったことも一助となり英ポンドは対ドル、対ユーロ、対円で上昇。その後12月FOMC議事要旨で当局者のタカ派姿勢が改めて示されると英ポンドは対ドルで小幅に下落し、1.20台半ばで推移。5日、米12月雇用統計を翌日に控え様子見姿勢が広がる中、米国時間朝方に発表された米12月ADP雇用報告が市場予想対比で堅調であったことからFRBの引き締め姿勢緩和期待が後退し、英ポンドも対ドルで売られる展開に。また、ECBの金融引き締め継続が再び意識され、対ユーロでも英ポンドは一時0.8860台まで下落。6日、NY時間入りまでは前日の流れを引き継ぎ英ポンド安方向の推移をしていたものの、市場予想よりも弱い賃金の伸びを示した米12月雇用統計の発表とともにドル安基調に転換。その後に発表された米12月ISM非製造業景気指数も市場予想を下回ったことでドル安が加速し、英ポンドは1.20台半ばまで上昇。一方、対円では終日前日5日と同様の159円台半ばを中心としたレンジ推移に終始して週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は底堅い展開を予想。今週は英11月鉱工業生産指数や米12月CPIといった重要経済指標や12月ECB議事録の発表を控える。先週末に発表された米賃金指標やサービス業景気指数の鈍化を受けたドル安基調の継続を見込むも、ここ数か月市場に大きな影響を与えている米物価指標の発表を控え、週前半は様子見姿勢が強まると考えられる。また、今週はペイリー英中銀総裁も予定されている。依然として高止まりしている英国のインフレ率を半減させると表明した英スナク首相の公約に同調し、一層の金融引き締め姿勢を見せる可能性も。米物価指標で相場は振られると考えられるものの、基本的に英ポンドは底堅く推移すると予想する。

## (3) 先週までの相場の推移

先々週から先週(12/26~1/6)の値動き: (対ドル) 安値 1.1842 高値 1.2126 終値 1.2093  
(対円) 安値 155.36 高値 162.34 終値 158.47



## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6740 ~ 0.6890 92.00 ~ 93.80 円

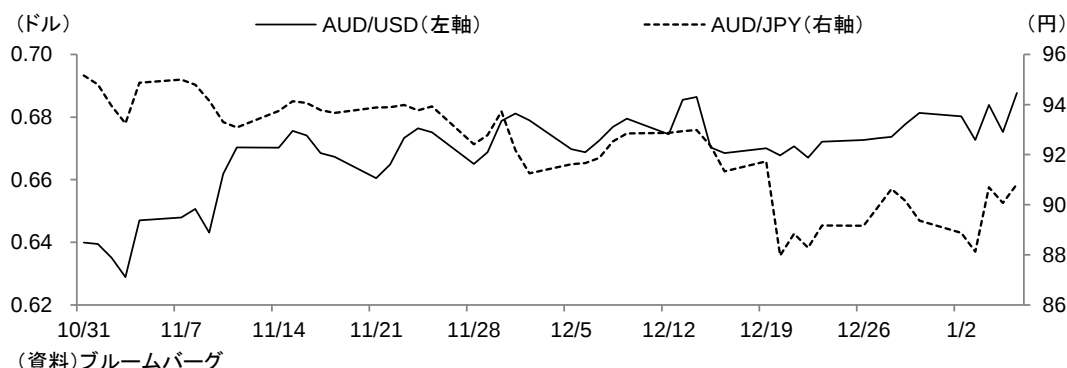
## (2) ポイント【先々週から先週の回顧と今週の見通し】

先々週から先週にかけての豪ドル相場は0.67台前半から0.68台後半まで上昇。26日中国国家衛生健康委員会がコロナ規制の一貫として実施していた入国時の隔離義務を1月8日から解除する旨を発表したことを受けて、上海株が上昇。人民元にも買いが膨らみ豪ドルも連れ高に。28日、豪ドルは0.68を上抜けた後反落。中国旅行者によるコロナ感染拡大が懸念され米株価が反落したことで頭を押さえられた。29日、一旦0.67台前半まで下落した後、堅調な米株を背景に買い戻され0.67台後半まで上昇。30日、日銀次期総裁に山口前副総裁の名前が挙がっていること等から日銀による引き締め政策が意識され円買いが優勢に。米ドル安の展開となり豪ドルは0.68近辺まで上昇して年を越した。年初1月2日は、シドニー、東京、NY、ロンドン等、多くの都市が休場で、取引閑散。終日かけて0.68近辺をもみ合い。3日、日銀による出口政策を見越した円買いの流れが強まり、ドル/円相場が130円近辺の支持線を下抜けると、豪ドルは一時0.68台前半まで上昇。その後、独12月消費者物価指数(CPI)が予想以上に鈍化したことでユーロが急落すると、米ドルが大きく買い進まれ、豪ドルは反落した。軟調な米株価も重しとなり、豪ドルは一時0.66台後半まで下落した。4日、中国当局が一部の大手不動産開発業者の支援措置を検討しているとの報道から人民元に買いが入ると、豪ドルは上値を追う展開に。更に、「中国が豪州産石炭禁輸の一部解除検討、4月に再開も」とのヘッドラインが流れると豪ドルは更に買いで反応し、瞬間的に0.68台前半まで上昇した。その後一旦半値戻しの後、ロンドンオープン頃から再び買い進まれ0.68台後半まで上昇。堅調な米11月JOLT求人件数を受けて米ドルが買い戻される展開に、豪ドルは小幅売られて0.68台半ばで引けた。5日、米12月ADP雇用統計で民間部門雇用者数が予想以上に増加し、旺盛な労働需要が継続していることが示されると、FRBによる利上げ継続への懸念が高まり株価が下落。豪ドルは米株につられて0.67台半ば近辺まで大きく下落した。6日、米12月雇用統計で非農業部門雇用者数が市場予想を上回り増加し、失業率も市場予想を下回る強い結果となったものの、平均時給の弱さが材料視され、株高、債券高、米ドル安の展開に。更に米12月ISM非製造業景気指数のヘッドラインが予想を大きく下回り50を割ったことから米ドル売りが一段と優勢となり、豪ドルは0.68台後半まで上昇し越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い値動きを予想する。年末年始にかけて中国コロナ規制緩和および中国不動産開発業界の借り入れ規制緩和に関する報道等を背景に人民元高が大きく進行しており豪ドルの支援材料となっている。又、中国による豪州産石炭買い入れ再開の報道も豪ドルのサポート材料。中国要因に加え、先週の米12月雇用統計を受けた米株価高・米ドル安の流れを背景に、豪ドルは当面底堅い値動きが継続すると見る。市場の注目は今週木曜日に発表される米12月CPIに集まっている。市場では既に米物価上昇の減速を織り込んでいる為、逆に想定した程の減速が確認できなかった場合、豪ドルは急落する可能性がある。年初以降もボラティリティが高止まっているため、指標発表前後の大きな値動きには注意を払いたい。

## (3) 先週末までの相場の推移

先々週から先週(12/26~1/6)の値動き: (対ドル) 安値 0.6679 高値 0.6886 終値 0.6876  
(対円) 安値 87.41 高値 91.06 終値 89.37



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。